花登筐

氷山のごとく

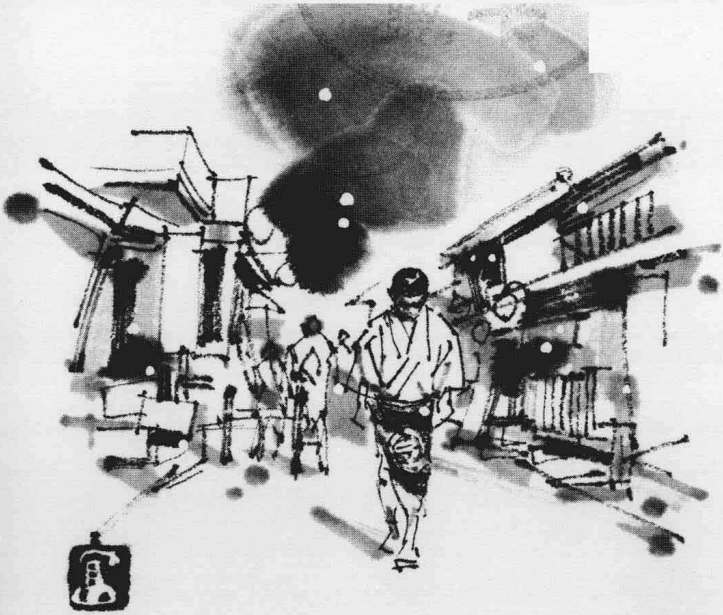
③

「小僧大将」篇

東京新聞出版局

氷山のごとく③

「小僧大将」篇



東京新聞出版局

氷山のごとく③　「小僧大将」篇

昭和五十六年三月二十日　第一刷印刷
昭和五十六年三月二十七日　第一刷発行

著者　花登筐
発行者　真野義人
発行所　東京新聞出版局
東京都港区港南二ノ三ノ一三
中日新聞東京本社
振替口座(東京)五一五四九七
電話　〇三-四七一-二二一一(代表)
〇三-四七二-四四三四(直通)

印刷・製本　大日本印刷株式会社

©1981 KOBAKO HANATO

ISBN4—8083—0031—1

ISBN4—8083—0034—6

C 0393　¥0930 E

氷山のごとく③　「小僧大将」篇　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「謝恩大安売り」 7
丹羽屋洋服部 100
大商人始動 154
大きな海 203

装画・さし絵／成瀬数富

〈前巻までのあらすじ〉

▼名古屋の問屋街・長者町に丸幸商店という洋品雑貨商があった。当主・幸一郎は、易占いに凝りすぎ、奉公人たちも方位で集められた。主人公・輪助もその一人で、北海道から雇われた小僧である。▼そんな輪助が、ひょんなことから知り合った丹羽屋の番頭・忠助から、商人として隠れた部分に何かがある氷山のような人間になれと教えられる。▼輪助は、雪娘のようなご隠居さまのおふじにせがまれて、小樽の話を聞かせに通っているうちに、身体の不自由なおふじを自由に外出させようとしない幸一郎やその妻ふくの冷たい仕打ちにおみねとともに強い憤りを感ずるようになった。▼関東大震災のとき、焼け跡の小屋に住むおふじの実父服部一之助をわざわざ横浜に訪ねた輪助は、おふじが実の娘以上の条件で養女になったとき、かなりの財産が丸幸に渡され、危機を救ったこと、丸幸商店の真の主人はおふじであることを知る。そしてそのおふじを何とかして、外へ出してやりたいと思う。▼関東大震災のとき輪入缶詰めを売った二百円を元手に輪助は、丸幸商店に働きながら、おふじのためにと丸本商店の名で商売を始める。忠助の紹介で知り合った〝一匹狼〟大上との取引を足がかりに、輪助は丸本商店に少しずつ着実に儲けを貯えていった。▼仁吉は輪助が売った商品の手柄をゆずってくれたおかげで、幸一郎やおふくの信用を得て番頭に昇進、名前も〝仁助〟と呼ばれるようになったが、おかげで他の小僧や番頭にねたまれる。▼丸幸商店は幸一郎の易占いの思惑が外れてまた倒産寸前となった。「これは、ある人から預かっているお金です。それを貸すので利息は貰いません。その代わり、易占いがどう出ても、この私にすべて許しを得て下せ」と輪助は千円の金を幸一郎に貸す。▼輪助は丸幸商店の陰の経営者となったのだが……。

氷山のごとく③

「小僧大将」篇

謝恩大安売り

それから大上の家へ行った輪助は不機嫌そうな大上から

「ああ今日、仁助から在庫仕入れされたぞ」

「あれ売れますか」

「見本の中には色の変わったもんもあるんで儲かりはせんだろが……」

とは輪助の予測通り。

大上の自信はなさそうだった。

輪助はそれから丸幸商店へ戻ると倉庫からこれ又仁助が不機嫌そうな顔をして在庫品を出していた。

「仁助さん売れたですか？」

知りながらも輪助は聞く。

「ああ売れたことは売れたが、大将はそんなに安く売りやがってと怒りやがるんだ。まったく今日まで倉庫へ放りこんでおいて安くも何もねえもんだ」

「仁助さん。その品物の中で色の変わったものがあったのではねですか？」

「ああ、あったぜ」

「それ一つ二つ出して下せ」

「どうするんだ？」

怪訝そうな眼を向ける仁助に

「勉強してみてと思いますだから……」

「しかし輪吉、その分又売値が減ったと大将に……」

「心配ねです。大上さんに明日にでも持って行くからと言っておいて下せ」

「ようしわかった。しかしまったく大将に一度売りに廻れと言いてえよ」

仁助は愚痴ったが、その仁助は勿論のこと輪助も知らなかったが、その頃その幸一郎が販売に廻っていたのだから、世の中変われば変わるものである。

元来丸幸商店は前売問屋である。目下仁助が在庫処分の為に販売に廻ってはいるが、あくまで店頭販売が主体で、ただ佐助のみ販売に廻っていたのも、やはり過剰仕入れの結果である。その佐助が辞めた今、佐助

の代わりに販売に出たとあれば、殊勝なことと言わねばならぬのだが、そうではなかった。
その真相がわかったのは、その夜であった。
夜の食事がすみ、風呂から出て来た幸一郎は、入れ替わりにおふくが風呂に入るのを待ちかねたように輪助を奥の間に呼んだ。
「輪吉、まあ坐れ」
と座布団を差し出したから輪助は何かあると察したが、今度は茶箪笥の戸棚を開けて、せんべいを取り出して、
「これを喰べ」
と輪助の懐に押しこんだから、察するどころか何かあることは確実だとわかった。すると案の定
「輪吉、今日のモスリンだが……あれ売れたか？」
と幸一郎は切り出した。
「売れたです」
「何、売れただと？　幾らで売れた？」
「約束通り仕入れ値です」
「どこで売れた？」
輪助は困った。何故そんなことを尋ねるのか幸一郎の真意が解せなかったからである。
「なあ輪吉、どこで売れたか言ってくれ」
「方々でです」
「方々だと？」
「そです。長者町通る小売屋さんを見て泣きついたですだ。そして二、三十人の人に買ってもらったですだ」
一日に、それだけの人数に売れる筈がないのに、信じたらしい幸一郎は
「やっぱりちっせやあ小僧は得だ」
と呟いたのである。
それから暫く幸一郎はもじもじしていたが言い辛そうに
「なあ輪吉、明日もそうやって売ってくれせんか……」
と言い出したから輪助は驚いた。
「大将、おら全部売ったですだ」
「それは知っとる」
「そったら、又仕入れなさるのですか？」
幸一郎は渋い顔をした。
「大将、仕入れる時にはこのおらに相談してほしいとあれほど約束したでねですか……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「約束は守っとる」
「なら品物はね筈ですが……」
「それがある……」
「なして……一体……」
「いや輪吉、怒らんと聞いてくれ。いやこの主人としての気持ちを汲んでくれ」
と奇妙なことを言い出してから
「実はあのモスリン、お前に言った数量より、本当は倍仕入れたんだ」
輪助は唖然とした。
「いや本当の仕入れ量を言おと思ったが、あの時、小僧の素人のお前に売れえせんと決めつけられてわしは癪に障った。だからようしどんだけ高売れるか、わからせたる、そう思って今日売りに廻った」
そこで輪助は初めて幸一郎が販売に廻った事実を知ったのである。
「それで、売れながったのですか？」
幸一郎は渋面を作った。
「丸っきり売れながったのですか？」
「いや丸っきりてことはねやあ。売ろと思や売れるんだが、ちょこっと安い……」
「ちょこっとて仕入れ値ぐらいですか？」
輪助は意地悪い質問をする。
「いや、仕入れ値よりちょこっと安い」
どうやらちょこっとぐらいの安さでないことは、今日の大上の判断から見ても明らかであった。
だから輪助は又もや
「ならそれで売られたらどですか？」
と突き放す。すると
「輪吉！　そんなことしたらみすみす損こくんだぞ！」
と怒り出したから輪助もあきれた。
「大将。玄人の大将がおらに内緒で、しかも倍も仕入れられたんですから、損が出ても仕方がねです」
「しかし輪吉。損出いてはお前の借金返すのが遅れる。それよりお前が仕入れ値で売れるんなら損はせんですむだろが……」
輪助は溜息をつきたくなったが、だと言ってあれ以上大上に頼むことは出来ず、それならばと
「実は大将、おらもほんとはまだ売れてねです」

「何でやあ！　お前さっき全部売れたと言ったでねやあのか？」
「大将、まんだ倉庫さ品物入ってねです」
「そんなら二、三十人に当たったと言うのは嘘ついたんか！」
「当たりましただ。見本を見せて。だどええ返事はもらえながったですだ」
幸一郎は怒るに怒れず、顔を歪める。
輪助はそんな幸一郎をぐいと見上げて
「だど大将、おら大将に約束した以上はどげなことしてでも仕入れ値で売りますだ。死んでも売りますだ！」
小さな輪助が初めて現した気迫に幸一郎がややたじたじとすると、輪助はすかさず
「大将。小僧のおらでも死んでも仕入れ値で売ると言ってますだのに、ご主人の大将が売れねわけはねと思いますだが……」
幸一郎はもう怒りを見せるどころか、目をしょぼつかせる。
「そですから大将も何とか売って下せ。但し仕入れ値以下では困りますだ。そしてどしても売れね時には又相談の上にしてえと思いますだが、どですか？」
「わかった……」
「それから大将、くどいよですが、約束は守って下せ。約束を守らねでモスリン仕入れて、又その上に数誤魔化されては、こんなになりますだ」
と例の変色したメリヤスのシャツを見せて
「今日、仁助さん、これ売れたと言ってなさったですだが……」
「ああ。売ったとは言っとったが……」
「それで賞めてあげなさったですか？」
「賞めるだと！　何で安う叩き売りおったのに賞めんならん！」
こと仁助のことになってくると、幸一郎の語気は強くなる。
「大将。これ見て下せ。このシャツ元々黄色でしただか？　薄茶でしただか？　白だったと思いますだが……。新品のモスリンでも仕入れ値で売れねのに黄色ぐなった白シャツが売れただけでも大変なことでねですか？　よく売れたと思われねですか？」

「……ああ。よう売った……」
幸一郎は半ば自暴気味で返事をする。
「なら賞めてあげて下せ」
幸一郎は黙りこむと
「大将。もし叱られたら仁助さん、これから先、又叱られるのではねかと、売られなくなるのではねですか？　在庫は白シャツが黄色ぐなる前に売った方がいいと思いますだが。そでねと大将のモスリンも売ってもらわねとならなぐなるかも知れませねから」
とは幸一郎が売れぬと決めてかかったような輪助の言葉に、幸一郎も一瞬睨もうとしたらしいが、その気力もそがれたらしく、又顔をそむけた。
「大将。だからみんなの前で賞めてあげて下せ。賞めるのはただ。それで売る気を仁助さんに出させれば得でねですか？　そだから明日の朝、賞めてあげて下せ。さもねと……おら」
「……わかった」
と、幸一郎は慌ててうなずいた。
「ああ、それから大将とおらの夜の話は明日から倉庫でやることにしてです。その時帳面も見せて下せ。約束ですから……」
輪助が立ち上がろうとすると縁側から、湯上がりのごつさまが姿を見せた。
ごつさまのおふくは輪助を見ると
「輪吉、こんなとこで何しとる……」
と早くも口をとがらせる。
「おら今、大将から倉庫の整理が悪いと叱られてましただ」
と変色したシャツを見せる。
「何でやあ！　そのシャツ色変わっとる。そんでは売れせんのは当たり前。お前さま、こんな小僧に倉庫の番させとるからこんなシャツが出来るのだがなも。何の役にも立たせんわ、倉庫の番も出来せんこの小僧。あの時暇出いとったらよかったのに……お前さま……」
もう一度考えてみては、とおふくが言い出そうとする寸前に、幸一郎は慌てて
「ほんだで今叱っとった。ええか輪吉これから気いつけやあよ」
とは、さっきからの続きもあってやはり語気が弱か

った。
「お前さま。そんな怒り方ではこんな小僧ちょこっとも効けせん。輪吉！　これからこんなことしたら旦那さまがどう言われようと、この私が暇出いたるでな！」
　これには幸一郎は明らかに狼狽を見せた。
「おふく！　店のことはこのわしが見とる。お前は口出すのでねやあ……」
「いえ大将。おらがいけねです」
　輪助は頭を下げて部屋を出た途端におふくの例のきんきん声が障子を震わせた。
「お前さま。あんな小僧を何で庇いやあす！」
「庇っとるもんか！　このわしも腹立って、腹立って口にも出せんくらいだ！」
　この幸一郎の返答は、恐らく本音であったろう。
　輪助も自尊心高き幸一郎の憤りは充分知っていた。そしてその憤りが、裏目に出ることを警戒せねばならぬと再び考えた。
　今日のように仕入れたモスリンの数量を輪助には半数しか教えなかったからである。
　幸一郎自身「主人の気持ちを汲んでくれ」と洩らしたように、あの時点でも「主人が小僧のお前の言う通りすべてを聞かんならんのか！」と思っていたに違いない。いや、自分の睨んだ眼に狂いはないとあのモスリンが売れることを信じこんで、何とか高値で売って来て
「輪助見てみい！　こんなに高売れたではねやあか！　お前の言うこと聞いとったら、儲けはふいになっとったんだぞ！　やっぱりお前は素人の小僧。ほんだで商いのことはこの主人のわしにまかいとけ！」
　とすべて相談するという誓約を守らずにすむ方法を考えたのかも知れない。
　小僧にいちいち相談せねばならぬ主人の屈辱――。
　それは解せる輪助であるし、今もあれだけ輪助から言われたことでどれだけ煮えくり返るような憤りを幸一郎が抱いているか、それも又察しがつく。その結果が、今後もあんな無茶な仕入れにつながってくるとあれば
（あれ以上怒らせぬ方がよいのではねか？）
　と考えかけて、さっき幸一郎が懐へ入れてくれたせんべいを無意識に口に入れていた。

ぐにゃりとした歯ごたえのないせんべいは明らかに湿っていた。

輪助はその湿ったせんべいを嚙んで、ふと幸一郎の自尊心を連想した。

幸一郎の自尊心にも歯ごたえのなさがあったからである。

なるほど、幸一郎は主人として、小僧に商いのことをいちいち相談することにかなり屈辱を抱いても当然ではある。しかし今日のように、自分の予想が外れ、仕入れ値より安くしか売れぬと知るや輪助に何とか売ってくれと言い出しているのはどういうことか。

主人の自分が売れぬから、小僧の輪助に売ってくれと頼むことに幸一郎は屈辱を感じぬのであろうか——。

となると幸一郎の自尊心たるや一体何であろうか？と輪助も小首をかしげたくなってくる。

しかもである。「主人の気持ちを汲んでくれ」と仕入れ数を半分隠していたことまで打ち明け、わが仕入れの眼のなかったことを自分で立証し、その上に販売能力のなさまでわざわざ披露することに屈辱を感じないとすると、幸一郎の自尊心たるや正しく形だけのせんべいと同じではなかろうか。

せんべいとは、ぱりっと歯ごたえのある湿り気のないものが、本当のせんべいと言うべきである。

仮にもし幸一郎に真の自尊心があるならば、今日のように輪助に思い知らせるべく倍仕入れたことを隠しておいても、売れぬとわかったら身銭でも切って損を埋めそ知らぬ顔をしている筈である。

それが主人としての自尊心であろうし、又そんな主人ならば、輪助が怒らせれば怒らせるほど、屈辱に耐えかねて店でも叩き売り、利息をつけて輪助に金を叩き返すことであろう。

だが幸一郎はどうやらそこまでのことは出来ぬらしいのである。

確かに幸一郎は小僧に指示され、相談せねばならぬことには屈辱感はあるらしいし、現に「銭叩き返して暇出いてやる」とまでいきまいた。しかし和助から別家料を要求されると途端におろおろとしているし、今日も損が出ると知るや、もう売ってくれと頼みこんでいる。

つまり屈辱感はあっても、損や出費となると途端にどんな屈辱すら屈辱とは感じなくなってくるらしい。

そんな損失や出費を恐れる幸一郎だからこそ、今まで才覚がなくとも、丸幸商店をじり貧の状態のままでも続けられていたのかも知れない。

（だとしたら……）

輪助が幾ら怒らせても、屈辱感を感じさせたとしても、損を出させず、その実績をあくまで幸一郎の手腕として、自尊心をくすぐってやれば屈辱感も消えてくるのではないであろうか——との結論を輪助は出したのである。

（その為には出来るだけ一人でやっては損を出すとこりごりさせてやることだ……）

輪助は、翌日から幸一郎の余分に仕入れたモスリンのことには一切顔をそむけて、

「輪吉何とか売ってくれせんか」と幸一郎に頼まれても「おらの分で手一杯です」と突き放していた。

そして一カ月ほど経ってから、漸くそのモスリンを半値で大上に売り捌き、幸一郎をがっくりさせたのである。

二、三カ月も経つと、丸幸の店では実に奇妙な現象が起こっていた。

夜になると、幸一郎は

「医者から体動かさんと早死にすると言われたんで、夜、町中を一廻り歩いてくる」

とおふくに告げて表から出ると、そのまま裏口へ廻り、倉庫へ入ると鍵を中からかけて

「輪吉今日の売り上げだが……」

と報告する。その帳面を見て

「あんまり売れませねだな」

と輪助が感想を洩らす。

「ほんとにまあみんな役に立たん連中ばっかりで……」

大抵、幸一郎は奉公人のせいにする。

「出銭の帳面見せてもらいてですが……」

これは輪助の方からいつも要求する。

「ああ、これだ」

開かれた帳面の出費の明細を一つずつ輪助が目を通す。

「この香典とあるのは何ですか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com